

大平先生の追憶

ハンス・H・ベアワルド

大平先生は、その友人知己から、オトウサンと呼ばれていました。私も、心密かに、先生を日本における自分の父親だと考えていましたが、残念なことに、面とむかつてそうお話ししたことはありません。先生が亡くなられたことを知って、身内のものを失ったような深い悲しみを感じています。残っているのは誰も埋めることのできない空しさばかりです。

大平先生は、とても親切で思慮深い方でした。はじめてお目にかかった一九六三（昭和三十八）年の夏、先生は外務大臣をしておられました。私の日本の国会に関する研究は始まったばかりで、国会手続を見聞するには、この研究プロジェクトへの承認が必要でした。先生は、その許可を与えられただけではなく、喜んで質問に答えられたのです。

この最初の会見で、私は深い感銘を受けました。先生は、たいへん思いやりがあり、私を気楽にさせようと心を砕いてくださいました。間違いなく、先生は、私が先生の超多忙のスケジュールの中から貴重な時間を奪うのを気にしていることを知っておられたのです。池田総理の最も信頼する国会問題処理の戦略家として、先生がどれほど国会の内部機能を理解し、熟知しておられるかを私は、少しずつ知って行きました。先生は、どこから見ても「師」でありましたが、最良の教師がみなそうであるように、先生は、安直な解答をあたえるのではなく、ひとを導いて知らしめるといふやり方をとられました。

この最初のやや公式的なインタビューのあと、何度もお目にかかることになりましたが、大平先生は、私を私邸に夜まわりする大平番の記者グループや、非公式のオフレコ記者会見に仲間入りさせてくださいました。それは、日本の統治に責任を持つ人々と、世の中に情報をあたえる役割を持つ人々の間の情報のやりとりをうかがい知るすばらしい経験だったのです。

大平先生はよく静かに坐っておられました。その沈黙ぶりは、世の人の知る先生の人柄の目立つた特徴となりました。ただ、あまり知られていなかったのは、対談者が先生の考えに対して直接あるいは間接に述べるコメントや質問にじつと耳を傾けるとき、その顔をよぎる表情の微妙な変化であります。先生はゆっくり考えするという評判でしたが、私の印象はちがいます。というのは、当時から私も私には、先生は議論中の問題を要約するのに適切な言葉をみつけようとしておられたように思われるのです。先生のコメントはいつも必ず問題の核心を衝くものでした。

時には愉快なこともありました。その一つは、一九七四年の参議院選挙でいくつかの県を旅行したときのことです。大平先生は、ロスアンゼルス・タイムズのサム・ジェイムスンと私を自民党の候補者応援の数日間の遊説に随行して観察するよう誘ってくださいました。旅行は強行軍でしたが、飛行機や船や列車の中では、くつろいだ話をする機会もありました。先生は、終始陽気なムードでしたが、共に旅するわれわれはみな、先生の人生に対する異常な熱意と、すばらしいユーモア感覚（もっともそれはしばしば隠れたものでしたが）を改めて知らされたのです。先生は、まことに多くのしやれを口にし、また実に速やかに多くのしやれの中から適切にポイントを理解されました。

もう一つ印象に残ることがあります。大平先生が国際会議からの帰途、わざわざ私の家を訪問されました。私

たち夫婦は、ロスアンゼルスの一地区に住んでいましたが、それは市の中心部からはかなり離れたところでした。ですから、車ではかなりの時間が必要で、ちょうど、東京の下町から世田谷区瀬田の住宅地に行くぐらいかかります。妻と私は、大平先生が、アメリカの一教授の家族がどんな生活をしているかを知るため、自らそんな長い時間を費やしてやってこられたことを深く光栄に感じました。

最後にお目にかかったのは、一九七九年十月の総選挙の数週間後のことですが、先生にとつては愉快な時期ではありませんでした。党内のライバルたちのため、国会運営や党内問題の処理がとんでもなく困難になっていたのです。先生は、自分のかかえている問題をほとんど口にしませんでした。そこで、私たちの論議はもっぱら国際情勢に向けられました。先生は、国際情勢についてはきわめてよく熟知しておられ、率直な論評を加えるとともに、鋭い質問をされました。全くのところ、新しい情報と複雑な問題に対する異なったアプローチを求めつづけるこの資質に、私は深い感動を覚えました。先生は、一つの人格の中に、政治家と、行政家と、学者の属性を兼ねそなえておられました。先生が亡くなられて寂しさ限りがありません。私は、そのあたたかく、寛容な人間性をいつまでも忘れることはないでしょう。

(カリフォルニア大学ロスアンゼルス校教授)